

アウエ村のこと

●原 口 武 彦

(新潟国際情報大学教授)

アウエ村。コートジボワールの経済的主都アビジャンの中心部から約30キロメートル、アレペに向う街道沿いの小高い丘の上にあるこの村は、人口2000人ほどの何の変哲もない熱帯雨林地帯のアキエ人の村である。

私がこの村をはじめて訪れたのは1967年秋、私の第1回目のアビジャン滞在時であった。現地の新聞で、この村で「世代交代の祭り」が行われることを知り、ミシュランの道路地図を頼りに、1人のこの見物に出かけていった。「世代交代の祭り」とは、コートジボワール東南部のアカン語系諸族の間で広く行われている祭りの一つで、通常、四つに分けられている男たちの世代組の間で、村の自衛の任にあたる世代が新しい組に交代する儀式であり、10数年に1度行われる、村の伝統にとってはきわめて重要な祭りである。

そのとき以来、私は何かにつけてこの村を足しげく訪れるようになり、昨秋のアビジャン訪問の際も立ち寄ったので、すでに30年のつきあいということになる。

西アフリカでこのアウエ村ほど、数多くの日本人が訪れた村はないだろう。私のアジ研時代の3回にわたるアビジャン駐在中、また短期の調査で現地を訪れた際、農村を見学したいと申し出られた日本人はみなさんこの村に案内させていただいた。著名なところでは小倉武一、大川一司、坂本慶一、川田順造など諸先生、アジ研の同僚たちはもちろんのこと、私の妻子5人も全員、表敬訪問している。

何の前ぶれ（方法がない）もなく突然訪れる私たちを、村長アントワンヌ氏は「アヒーヨ」とのどかなひびきの挨拶で歓迎してくれるのが常だった。そのアントワンヌ氏も数年前、他界した。1967年当時は、アビジャン市を出れば未舗装のガタガタ道で、そこから2時間近くもかかったが、今は完全舗装の街道でわずか10分。しかし街道をそれて村内に入れば、そのたたずまいは、30年前とがんなほどに変わっていない。そして私たちをゆったりとした村のリズムに引き入れてくれる。

この欄に私ごときが顔を出すということは、アジ研アフリカ村も「世代交代の祭り」のときを迎えたということだろう。